人・言・サロン

「看護師になって良かった」

ミャンマー医療支援に参加 小堀他津子さん(46)

サイクロン「ナルギス」が直撃したミャンマーで医療支援活動にあたった国際医療支援団体・AMDA（岡山市）。ミャンマー人スタッフや現地保健当局と協力し、ヤンゴンの南約70キロのクンジャンゴン市で、AMDAスタッフとして巡回診療に加わった「アスカ国際クリニック」の小堀他津子看護師に、医療支援への思いなどを聞いた。【石戸諭】

――支援活動（6月7日～19日）では、どんな患者が多かったのでしょうか

クンジャンゴンは道がない場所もあり、時にボートで巡回診療を行うような場所でした。サイクロンから1カ月たっても不眠や頭痛、だるさを訴える人が多かった。子供たちは熱と皮膚疾患が特に多いような印象があります。雨期のせいか、じめじめとしていて外傷も治りにくいのではないでしょうか。

実感したのは地域コミュニティーの強さ。僧院や学校で診療したのですが、誰かが来ていないと、周りの皆が患者を呼んできてくれるのです。診療では薬も現地のものを使うのですが、入国してから医療行為の許可がおりるまでの間、皆で現地の薬について勉強しました。AMDAはミャンマーでの活動実績があり、相手と信頼関係ができていたので、そうしたベースがあったことも幸いしました。

――海外での医療支援活動経験は

今回で4回目です。インドネシアの洪水災害も支援に行きましたが、印象に残っているのは初めて行った台湾大地震（99年9月）ですね。現地に着いた時に、大きな余震があったり、軍隊のヘリに乗ってへき地の山中に入り、外傷を負った患者を診たり。その時の衝撃は忘れられません。それまでにも、支援活動に向かう際の渡航準備や、お医者さんのスケジュール調整をすることはありましたが、自分自身が海外を巡回することになるとはまったく思っていませんでした。

――実際に行ってみて、気持ちに変化はありましたか

今までは英語が出来ないことに尻込みして、「私が行っていいのかな」と思っていたのですが、今は「行こうという気持ち」が大事だと考えるようになりました。現地の人と同じ食べ物を食べ、一生会わなかったかも知れない人と空間を共有する。本当に勉強になったし、看護師になって良かったなと感じます。日本にいると、ボランティアを『してあげる』感覚に陥りがちですが、行くと『させてもらう』という気持ちになります。今は、自分のためにも行きたいと思いますね。

90年から、AMDA本部が置かれる岡山市楢津のアスカ国際クリニック（旧菅波内科医院）に勤務。趣味は映画鑑賞と車の運転。プロ野球・阪神タイガースのファンで「今岡誠選手がお気に入り」。